

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ショーペンハウアー哲学の無神論的解釈をめぐる論争に関する一考察
Author(s)	多賀谷, 誠
Citation	HABITUS , 27 : 47 - 64
Issue Date	2023-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53729">10.15027/53729</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53729">https://doi.org/10.15027/53729</a>
Right	
Relation	



# ショーペンハウアー哲学の無神論的解釈を めぐる論争に関する一考察

多賀谷 誠

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

## はじめに

クリストファー・ジャナウェイ (Christopher Janaway) とジェラルド・マニオン (Gerard Mannion, 1970-2019) は、20 世紀末からショーペンハウアー解釈をめぐる約 20 年間議論の応酬を重ねている。

ジャナウェイは、『手書きの遺稿』(以下、『手稿』と略す)において、ごく初期の思索から見いだされる「より良い意識 (better consciousness, besseres Bewusstsein)」概念とその使用を、ショーペンハウアー自身の宗教観の変遷を示す証拠として強調している。

これに対しマニオンは、2003 年に出版した著作『ショーペンハウアー、宗教と道徳性：倫理への謙虚な道 (*Schopenhauer, Religion and Morality: The Humble Path to Ethics*)』において、ショーペンハウアーを「無神論者」のレッテル貼りから解放することを試みている。マニオンはこの著作におけるほとんどすべての議論で、ジャナウェイの論文を参照し、ジャナウェイのショーペンハウアー解釈が、先行研究を無批判なまま受け入れたものであることを指摘している。この著作の出版以降も、両者は互いにショーペンハウアー解釈を巡って議論を続けたが、2019 年にマニオンが急逝し、論争は幕を降ろすこととなった。

本稿では、マニオンの著作におけるジャナウェイ批判を参照し、その批判の

妥当性を確認することによって、ショーペンハウアー自身の宗教観がどのように解されるべきかを究明する。ジャナウェイが最近の論考でも言及しているように、ショーペンハウアーを無神論者と呼ぶ方向性は、ニーチェにおいて定まったと言ってよい。ここでは、ジャナウェイ・マニオンによるニーチェの引用を比較し、両者の解釈を吟味する。また、マニオンの批判は、「より良い意識」概念を除いたジャナウェイの様々なショーペンハウアー理解に向けられている。ここでは、両者において合意可能と思われる「より良い意識」概念を問題射程に捉え、考察することを試みたい。

## 1. ジャナウェイの無神論的解釈について

ジャナウェイは、基本的にニーチェのショーペンハウアー解釈を踏襲している。まずは、ニーチェにおけるショーペンハウアーの理解を確認しておきたい。

哲学者としてのショーペンハウアーは、私たちドイツ人の中で最初に認められた妥協のない無神論者だった。[.....]存在の醜さは、彼にとって、与えられたもの、明白なもの、議論の余地のないものに数えられていた。無条件かつ実直な無神論は、ヨーロッパの良心が最終的に、そして非常に困難な形で勝ち取った代償として、彼の問題解決の方法の前提となっている。自然を神の善意と配慮の証拠であるかのように見たり、何らかの神聖な理性を尊重して、すなわち歴史を道徳的な世界秩序と究極の道徳的目的の常在的な証拠として解釈したり、敬虔な人々が長い間自分の経験を解釈してきたように、すべてが摂理であり、警告であり、魂の救済のために設計され、定められているかのように自分の経験を解釈したりすることは、もう終わったことなのである。[.....] このように、キリスト教的解釈を否定し、その「意味」を偽物と断ずるならば、ショーペンハウアーの問いかけが、

たちまち恐ろしい形で私たちに迫ってくる。「存在はそもそも何か意味を持っているのか？」[.....]ショーペンハウアー自身がこの問いに答えて言ったことは、単なる妥協であったし、神への信仰とともに打ち捨てられたキリスト教的な道徳観に留まり続けたことであつたと言えるだろう<sup>1)</sup>。

『悦ばしき知識』におけるニーチェの説明は、「無神論者としてのショーペンハウアー」像を定式化したと言ってよい。ジャナウエイは、老年のショーペンハウアーが『余禄と補遺』において、キリスト教について述懐した箇所を引用し、ショーペンハウアーとニーチェの宗教観の共鳴を指摘している。

1850年代には、ショーペンハウアー自身が、キリスト教は「科学によって絶えず損なわれながら、徐々にその終焉に近づいている」(PⅡ, 353)、キリスト教の「寓話」への信仰は「日に日に消えていっている」(PI, 121)、人類は「子供のドレスのように、それが破裂するのを止めることはできない」(PⅡ, 252)と、宗教を卒業しつつあることを描写している。このように、ニーチェが歴史的に進歩した無神論を主張することは、ショーペンハウアーの自己理解と一致するように思われる。しかし、同じ箇所でニーチェは、ショーペンハウアーにもキリスト教的な評価の視点が残っていることを批判的に指摘しているのである<sup>2)</sup>。

先ほどの『悦ばしき知識』の引用で確認したように、ニーチェはショーペンハウアーを無神論者とみなしながらも、彼の思想に含まれるキリスト教の残滓を批判し、それによって歴史的に進歩した無神論を主張するに至った。以上は、ニーチェに対する標準的な説明であるが、ショーペンハウアーの著作の英訳を出版したペイン(E.F.J. Payne, 1905-1983)や『手稿』を編集したヒュプシャー(Arthur Hübscher, 1897-1985)のようなショーペンハウアー研究者も、ニー

チェの読み方を紹介し、この解釈に与している。

したがって、ジャナウエイはニーチェ・ショーペンハウアー研究者の中では、受け入れられてきた解釈を踏襲している。しかし、最近の論文では、自身の研究の目的を「ショーペンハウアーが純粋な無神論者であることを立証すること」であると宣言し、このことはショーペンハウアーの思想から「神の概念を取り去っても、ショーペンハウアーにとって重要なものは何も失われない」ことで証明されると述べている<sup>3)</sup>。

ジャナウエイは、ショーペンハウアー哲学において、とりわけ道徳と倫理の説明が神概念を用いずとも、成立することを評価している。たとえば、ショーペンハウアーが道徳の源泉とみなす「共苦(Mitleid)」は、宗教の教義によって裏付けられた「同情」概念とは異なり、高度な認識主体である人間において、はじめて可能となる感情の能力として説明されている。ショーペンハウアーによれば、聖者や信心深い人々も、信条に則って行為するものの、それらは表面上、宗教や思想の刻印を施されたのみで、本質的には共苦を通じて意志の否定に向かっている(W I, 520)。ジャナウエイは、ショーペンハウアーが著作で示した無宗教的説明と神学批判が矛盾しないことから、ショーペンハウアーを無神論者としてとらえている。

## 2. ショーペンハウアーに対する無神論的解釈へマニオンの反論

ショーペンハウアーを無神論者とみなす伝統的な解釈を採用したジャナウエイに対して、マニオンは、ショーペンハウアー自身の宗教観に着目することで彼の哲学に含まれる神学的意味合いの再解釈を試みている。マニオンの基本的な立場は、『余禄と補遺』における「宗教は民衆の形而上学である」(P II, 360)という表現や『意志と表象としての世界』(以下、『主著』と略す)で示される

倫理学の結論が「救済」であったことから、ショーペンハウアーの哲学を、超越者や世界観を明示する宗教的体系に機能的に相似したある種の説明仮説とみなし、その点においてショーペンハウアー自身の宗教観がある程度謙虚であったことを示すものである。2003年の著作<sup>4)</sup>では、ショーペンハウアー研究における無神論的解釈の潮流とその底流にあるニーチェの解釈を考察している。この著作における、マニオン自身のショーペンハウアー評は、この19世紀ドイツの哲学者が、東方の宗教に共鳴した、という事実を踏まえ「無神論者というよりは、むしろ非有神論者である」<sup>5)</sup>と述べ、「ショーペンハウアーを無神論者とは言えない」という結論に落ち着いている。

ここで、ショーペンハウアーの宗教観を明確にするために、彼の批判的な継承者であるニーチェの評価をあらためて確認したい。ニーチェの初期の思索がショーペンハウアーから受けた衝撃は大きく、ニーチェの初期著作では概ね肯定的な評価が与えられている。代表的なものをあげれば、『悲劇の誕生』の初版『音楽の精神からの悲劇の誕生』(1872)から、『悦ばしき知識』(1884)を経て第二版『悲劇の誕生、あるいは、ギリシャ精神とペシミズム』(1886)にかけての変化は、そのままニーチェのショーペンハウアーへの評価の変遷と見ることができる。とりわけ、ニーチェの思索の後期に位置付けられる同書の第二版では、序文として加えられた「自己批判の試み」において初期の思索を振り返りショーペンハウアーについて反省的に言及している<sup>6)</sup>。ジャナウェイは、既に見たように後期の著作に位置づけられる『悦ばしき知識』からニーチェのショーペンハウアー評価を引用しているが、この評価に対しデヴィッド・バーマンは次のような疑義を呈している。

ニーチェの発言の最初の部分は実際に正しいのだろうか。例えば、ショーペンハウアーは、ホルバック男爵やショーペンハウアーとほぼ同時代のシ

エリーがしたように、神の存在を否定したり、無神論者を自称したり、神の存在に明確に反論した例は、どこにあるだろうか。彼の出版した著作の中には、そのようなものは見あたらないように思う。

マニオンは、バーマンの疑義に賛同し、ショーペンハウアーに対する「絶対的な無神論者」というレッテル貼りの不可能を主張している。すなわち、ショーペンハウアーの宗教に対する姿勢と哲学における主張とは、いみじくもニーチェがそのように捉えたようなある種の矛盾を含んでいる。しかし、「ショーペンハウアーは、彼の時代に流布していた神学を批判していたにもかかわらず」、たとえば、キリスト教との係わりに限定してみても青年期まで教会へ通い続けたことや彼の葬儀が教会で執り行われたことなどの事実から明らかであるように「宗教との交流が彼の哲学の形成に決定的な役割を果たしていたこと、そして宗教に対する彼の態度は、主に宗教の機能的性格」<sup>8)</sup>、いいかえれば、どのような宗教であれ苦しみを取り除くという目的を持っていたことを認めていたことが証明できる<sup>9)</sup>。

『余禄と補遺』において、「宗教は民衆の形而上学である」(P II, 360) と対話篇の登場人物デモフェーレスに語らせたように、宗教は哲学(真正の形而上学)に比して低いところに置かれるが、『主著』と「道徳について」では、隣人愛を含む広義の愛概念、すなわち人間愛(Menschenliebe)が道徳の源泉であると説き、世界のあらゆる宗教には同情、共苦の教義があるという洞察をショーペンハウアーは示した。また、ショーペンハウアー自身の思想においても、意志の完全な否定や放棄の境地は、それらが宗教の側では「恩寵」や「救済」と同一である(W I, 541) と語られている。この点は、『主著』における、宗教への歩み寄りの一例だと言ってよい。そして、この『主著』の読者の多くが想起するように、ショーペンハウアーの倫理説と意志の否定や放棄を主張する彼の

救済論は、それ自体宗教体系に相似している。

しかし、ニーチェがショーペンハウアーの思索の内にキリスト教の残滓があることを指摘したにもかかわらず、両者を専門とする研究者—たとえば、ショーペンハウアー全集を編集し、手書きの遺稿を整理したヒュプシャー (Arthur Hübscher) や、ショーペンハウアーとニーチェの著作の多くを英訳したウォルター・カウフマン (Walter Kaufmann) —たちにさえ、ショーペンハウアーを無神論者と誤解する傾向があることをマニオンは指摘している<sup>10)</sup>。

たとえば、カウフマンは『西洋哲学辞典』のショーペンハウアーの項目に「彼はヨーロッパの主要な哲学者の中で初めて無神論を主張した」<sup>11)</sup>とニーチェの無神論的評価を援用し、「[宗教は]ショーペンハウアーの形而上学や倫理学の細部にほとんど影響を及ぼしていなかった」<sup>12)</sup>と結論付けている。ショーペンハウアー自身の宗教観を度外視したまま、カウフマンはそれでもなお、ショーペンハウアーが歴史的に重要である理由は三つあると述べている。

第一に、「彼がヨーロッパの主要な哲学者の中で初めて無神論を主張した」ことである。第二に、一つ目とやや奇妙に並置されるが、ショーペンハウアーがヒンドゥー教や仏教に真剣に取り組んだ最初のヨーロッパの主要な哲学者であったことである。[.....]第三に、ショーペンハウアーが記憶されるべきであるとカウフマンが考える理由は、彼の主意主義が示す人間の本性における理性の優位性とは対照的に反理性主義を強調する後続の意志哲学者たちに与えた影響である<sup>13)</sup>。

カウフマンがショーペンハウアーに対して認める歴史的価値の理由の内、マニオンは最初の二つを事実に基づいて反論し、最後の一つを、まさにショーペンハウアーの宗教観を紐解く鍵であるとし、その点に関するカウフマンの無理解



を指摘している。

まず、バーマンが疑義を呈していたように、ショーペンハウアーを近代ヨーロッパ初の無神論者と見做すことは困難である。仮に、ショーペンハウアーをニーチェが言ったような「無神論の哲学者」の嚆矢と見做すにしても、ニーチェをはじめとして、今日無神論者と呼ばれる人々(たとえば、フォイエエルバッハ、マルクス、フロイト、ラッセル)に見られるような、宗教的道德(規範)や宗教的信念(信仰)に対する否定的な言明は、彼の著作のうちには見出されない。

カウフマンが第三の理由として強調するのは、ショーペンハウアーの思索の初期(「より良い意識」の概念)における意識の陶冶や成熟期における意志の否定まで、一貫して理性が大きな役割を担い、主意主義を超越する要素を含んでいたにもかかわらず、ニーチェらに大きな影響を与えたことだった。しかし、マニオンは、この第三の理由に対し自己撞着を指摘している。カウフマンは、宗教がショーペンハウアーに与えた影響を過小評価しているが、第三の理由で強調しているように、最終的にショーペンハウアーの思索は意志の否定へと歩みを進め、そこでは各宗教における意志否定の実例が提示されており、完全な意志の否定の境地さえ、宗教における救済や恩寵との対応関係が示されている。

「[宗教は]ショーペンハウアーの形而上学や倫理学の細部にほとんど影響を及ぼしていなかった」という、カウフマンの結論に反して、第三の理由で強調されるショーペンハウアーの主意主義的主張は、必然的に宗教と形而上学的话题に立ち返らざるを得ないのである。

マニオンの立場を総括すれば、カウフマンやジャナウェイが、ショーペンハウアーに対する宗教の影響を、ニーチェに倣ってショーペンハウアーを無神論者とみなすにしても、またキリスト教が与えた影響を看過するにしても、バラモン教や仏教、ヒンドゥー教など東方の宗教が与えた影響まで無視することは、

致命的な誤解である。マニオンは、カウフマンにおけるショーペンハウアーの宗教観解釈を批判したうえで、「彼[(カウフマン)]はショーペンハウアーを「無神論者ではなく、非有神論者」と呼ぶべきであった」<sup>14)</sup>と結論づける。すなわち、マニオンとしてはどれだけ譲歩するとしても、ショーペンハウアーは筋金入りの有神論者ではないというところまでしか認めることができないのである。

### 3. より良い意識概念について

より良い意識 (besseres Bewusstsein) <sup>15)</sup>概念は、ショーペンハウアーの初期の思索に現れる人間の認識能力であり、のちの学位論文『充足理由律の四つの根』と『主著』を準備する概説の要素を含んでいる。ジャナウェイとマニオンの両者は共に、より良い意識概念をショーペンハウアー自身の宗教観の変遷を示す証拠として強調している。しかし、両者の解釈は、この概念と『主著』における対応関係についてこそ一致するものの、ショーペンハウアーの宗教観について導き出された結論は正反対のものとなっている。すなわち、ジャナウェイは、より良い意識概念を、学位論文執筆に至るまでの過渡期における神学に依らない形而上学概念の素描として理解するのに対して、マニオンは、宗教的意味合いを含意したより高い価値、真の存在の探究のために設けられた概念として理解し、カウフマン、ジャナウェイらショーペンハウアー研究者の無神論的解釈を退ける根拠としている。

ベルリン時代にフィヒテを学び、結果的に袂をわかったショーペンハウアーは、キリスト教の形式的な教義から一層距離を置き、フィヒテとは異なる内的経験から真理を追究する道を模索している。この時期のショーペンハウアーは、いわゆるドイツ観念論の方向修正を試み、カントの認識論に則った、人間の二つの認識様式に着目していた。そこでショーペンハウアーは、『手稿』において、

感性、悟性、そして理性によって経験的世界を認識する人間の本性的意識（natürliche Bewusstsein）を「経験的意識（empirisches Bewusstsein）」と呼び（HN II, 329 ff., 360）、内的経験の超越性を説明するために、「より良い意識」の概念を導入している。経験的意識に対するより良い意識の超越性は、次のように説明されている。

この意識は全経験を超えており、したがって理論的にも実践的にも、全理性を超えている（すなわち本能である）。それは理性に関係していないが、一人の個人が経験と出会うこの不思議なつながりのおかげで、ここで個人には理性になるかより良い意識になるかの選択が生じる。もし彼が理性になりたければ、理論的理性としてはペリシテ人[非ユダヤ的で武骨な人物]になり、実践的理性としては悪党になるだろう。もし、彼がより良い意識でありたいと望むなら、私たちは彼についてこれ以上積極的に何かを言うことはできない。なぜなら、私たちが言うことは理性の領域に属するからだ。したがって、私たちはこの領域で起こることを口にするのみであり、このようにして、より良い意識について否定的にしか語るることができないのである。したがって、理性はその際に次のような動揺を経験する。理論的理性の場合、理性は天才に取って変わられ、実践的理性の場合は徳が取って変わるのを私たちは目にする。（HN I, 35）

ショーペンハウアーによれば、より良い意識だけが、人間の最も内側にある真の本質を構成しており、芸術（プラトンのイデアの観照）、倫理、聖性、禁欲主義など、人間の超感性的なものに対する関係を表現するすべてのものがこれに遡源するという（HN I, 27 f. 34 ff., 45 ff.）<sup>16)</sup>。このようにより良い意識という概念は、ショーペンハウアーが哲学体系を構築する際の要石になっている。

しかし、学位論文提出後には、そもそも経験的意識がどのようにして生まれたのかという問いに答えるために (HN II, 321)、叡知的性格の概念に触れている。この性格概念と同じく超越的であるより良い意識概念のはたらきを、すべての人間が時間の中で自分の人生を「選び」、自分を時間的存在として決定する、個人的かつ形而上学的な意志作用 (Willensakt) として理解するようになっている (HN II, 375 f)<sup>17)</sup>。

超感覚的なものを肯定的に認識するような人間の能力の仮定をするより良い意識概念は、『充足理由律』、『主著』にも現れる叡知的性格概念<sup>18)</sup>の採用によって、学位取得以降の時期を境に取り下げられることになる。マニオンは、ショーペンハウアーの思索の全体を、宗教や信仰そのものを代替する、いかえれば体系的な説明的仮説とみなしており、より良い意識概念をそのうちのひとつとしてとらえている。一方でジャナウェイは「より良い意識」の概念をこう解釈している。

ショーペンハウアーは、経験的な意識は、空間、時間、因果性の現象に限定されており、可能であればそこから逃れたいと願う、劣ったものであると信じていた。「より良い意識」があつてこそ、人間は真に価値あるものを見出すことができるのだ<sup>19)</sup>。

マニオンは、ショーペンハウアーをニーチェとは違うタイプのニヒリスト(すなわち存在を無価値なものとみなす)として捉えているジャナウェイがこのような理解を示すことは矛盾していると指摘している<sup>20)</sup>。しかし、ジャナウェイが端的に要約したように、より良い意識の概念は、ショーペンハウアーが模索したなにか価値あるものへの糸口の説明を担っていたのである。すなわち、ドイツ観念論がフィヒテらにおいて、人間の認識を超えた不可知な真の存在をいか

に理解するかという点で暗礁に乗り上げていたところを、「ショーペンハウアーは、「物自体」を「それ自体のうちに」あるものとして知ることはできないが、（基本的に自分の意志による）内的経験によって、「物自体」がどのようなものであるかを理解し、いわば「自体に近づく」ことができると常に主張していた」<sup>21)</sup>のである。

## おわりに

本稿は、ニーチェに由来するジャナウェイによるショーペンハウアーの無神論的解釈とそれに対するマニオンの反論に焦点をあてた。ジャナウェイは、ショーペンハウアーが自身の哲学に「神」の語を用いないことから、ショーペンハウアーを無神論者と解している。一方で、マニオンは宗教観や世界観を代替する説明仮説としてショーペンハウアーの哲学を理解しており、そこには宗教への謙虚な道が開かれていたと評している。

両者の調停を試みるならば、ショーペンハウアー本人の宗教観については実際にジャナウェイが受け入れたように「ショーペンハウアーは筋金入りの有神論者ではない」という点に落ち着くだろう。また、マニオンは存在の価値を認めないジャナウェイの主張は、より良い意識は神学を代替する概念であるという理解と矛盾すると指摘しているが、ジャナウェイは後年の論考で、より良い意識と『主著』における救済、すなわち意志の完全な否定によって、存在者は真の価値に到達するとしている<sup>22)</sup>。これを勘案すれば、ジャナウェイの解釈は、「無神論者」を「有神論者ではない」と読み替えたうえで、マニオンの批判も回避することができる。

しかし、ジャナウェイの最近の論考は、ニーチェのショーペンハウアー批判を掘り下げ、マニオンの解釈である説明仮説論とは決定的に対峙する方向へ向

かっている。ジャナウエイの無神論的解釈は再び議論の俎上へと上げられねばならないだろう。

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2132 の支援を受けたものです。

## 凡例

訳文は拙訳により、角括弧 ( ) は引用者による補足を [.....] は省略を表す。ショーペンハウアーの著作からの引用に際しては、以下に示す略号と頁数を記す。

WI : *Die Welt als Wille und Vorstellung*. Bd. 1, in: *Sämtliche Werke II*. Hubscher, Arthur.(Hrsg.). Wiesbaden: F. A. Brockhaus., 1977.

PI - II : *Parerga und Paralipomena*. in: *Sämtliche Werke V - VI*. Hubscher, Arthur.(Hrsg.). Wiesbaden: F. A. Brockhaus., 1977.

HN I - II : *Der Handschrifliche Nachlaß*, 5 Bände, Hubscher, Arthur.(Hrsg.). Deutscher Taschenbuch Verlag., 1985.

## 参考文献

Janaway, Christopher. "Schopenhauer" *German Philosophers*, Oxford., 1997.

Janaway, Christopher. "Schopenhauer's Pessimism." *The Cambridge Companion to Schopenhauer*, ed. Janaway, Christopher. 318-343. Cambridge University Press., 1999.

Janaway, Christopher. "Schopenhauer's Philosophy of Value." *Better Consciousness*, ed. Neil, Alex. Janaway, Christopher. 1-10. Wiley-Blackwell., 2009.

Janaway, Christopher. "Schopenhauer's Christian Perspectives." *The Palgrave*

- Schopenhauer Handbook*, ed. Shapshay, Sandra. 351-372. Palgrave Macmillan., 2019.
- Janaway, Christopher. "The Moral Meaning of the World." *The Oxford Handbook of Schopenhauer*, ed. Wicks, Robert L., 271-283. Oxford university press., 2020.
- Mannion, Gerard. *Schopenhauer, Religion and Morality: The Humble Path to Ethics*. Routledge., 2003.
- Mannion, Gerard. "Schopenhauer and Christianity." *The Oxford Handbook of Schopenhauer*, ed. Wicks, Robert L., 401-424. Oxford university press., 2020.

## 引用文献

- 1) Nietzsche, Friedrich. *The Gay Science*, trans. Josefine Nauchhoff and Adrian del caro, ed. Bernard Williams., (Cambridge University Press., 2001) 219.
- 2) Janaway (2019), p351.
- 3) Ibid.
- 4) Mannion, Gerard. *Schopenhauer, Religion and Morality: The Humble Path to Ethics*. Routledge., 2003.
- 5) Mannion, op. cit., p42.
- 6) Nietzsche, Friedrich., *Die Geburt der Tragödie ; Unzeitgemäße Betrachtungen*, in:*Nietzsche Werke : kritische Gesamtausgabe* , (de Gruyter, 1972.), pp13-14.6. Id.149.
- 7) Berman, David. "Schopenhauer and Nietzsche: Honest atheism, dishonest pessimism." ed. Janaway, Christopher. *Willing and Nothingness: Schopenhauer as Nietzsche's Educator*. (Clarendon Press., 1998)p.178.
- 8) Mannion, op. cit., p.40.
- 9) ショーペンハウアー哲学における宗教の役割を論じた先行研究に、白木悦生「ショーペンハウアーの宗教観」(佛教文化学会、『佛教文化学会紀要』1996 卷 4・5 号、161-178 頁

1996年)がある。

10) マニオンは、ロバート・A・ゴンザレスの先行研究を引用している。「ゴンザレス(1992)が指摘するように「ショーペンハウアーの哲学を古典的な無神論と見做す考え方が主流であった。サフランスキー、シュミット、ハッセ、ホリングデール、マギル、ヒュブシャー、ヴェッキオッティらの著作は、ショーペンハウアーをこのように解釈している」。(Gonzales, Robert A. *An Approach to the Sacred in the Thought of Schopenhauer*, (Mellen Research University Press., 1992) xiii.)この著作でゴンザレスが主張するのは、ショーペンハウアーが残した疑問が、人間の条件に関する疑問への彼のアプローチとともに、神や「聖なるもの」の問題への「バックドア」を残しているということである。私は、ショーペンハウアー哲学の神学的意味合いについて、特に彼の道徳的思考を参照しながら、これよりもっと明確に焦点を当てたいと考えている。」(Mannion, op. cit., p.39., n.1.)

11) Kaufmann, Walter. 'Schopenhauer' *The Concise Encyclopedia of Western Philosophy*, ed Rée, Jonathan and Urmson, James Opie., P294. HarperCollins Publishers Ltd., 1989. Revised ed.

12) Ibid.

13) Mannion, op. cit., pp41-42.

14) Ibid., nn11-12.

15) 「より良い認識 (besserem Erkennen, (HN II, 329))」あるいは「より良い知識 (besserer Erkenntnis (HN II, 360))」とも呼ばれる。

16) Novembre, Alessaandro. 'besseres Bewusstsein' *Schopenhauer-Lexikon*, ed. Lemanski, Jens., Schubbe-Akerlund, Daniel., P70. Wilhelm Fink Verlag Munich., 2021.

17) Ibid.

18) 表現の仕方に焦点をあてるならば、叡知的性格概念の導入によってショーペンハウアーはカント的な表現を甘受するようになったといえる。ただし、『手稿』における叡知的性



格概念は、あくまで経験的意識の説明のために導入されたものであり、カントに則った説明が付される『充足理由律』、『主著』に現れるものとは異なる性質を持つことに留意したい。

19) Janaway (1997), p235.

20) Mannion, op. cit.,p48, n35.

21) Mannion, op. cit.,p49.

22) Janaway (2009), p2.

## **A consideration of the controversy over the Atheist interpretation of Schopenhauer's philosophy**

Makoto TAGAYA

Graduate School of Humanities and Social Sciences

(Doctor's Degree Program),

Hiroshima University

This study explores the religious views of Christopher Janaway and Gerard Mannion (1970–2019), who had debated Schopenhauer's philosophy for approximately 20 years since the end of the 20th century.

Mannion, in his 2003 book, *Schopenhauer, Religion and Morality: The Humbleth to Ethics*, attempted to free Schopenhauer from the "atheist" label of readers and researchers alike. Almost throughout the work, Mannion referred to Janaway's article, indicating that the latter's interpretation of Schopenhauer was an uncritical acceptance of existing research.

This study investigates how Schopenhauer's view of religion should be interpreted by referring to Janaway's criticism in Mannion's work and confirming the validity of that criticism. As Janaway mentions in his recent essay, the direction of calling Schopenhauer an atheist was settled in Nietzsche. We will compare Nietzsche's quotations by Janaway-Mannion and examine their interpretations. Mannion's criticism was directed at Janaway's various other interpretations of Schopenhauer without adequate reference to the concept of "better consciousness." Therefore, I will attempt to examine the

concept of "better consciousness" (also called better awareness (besserem Erkennen) or better knowledge (besserer Erkenntnis)), which seems to be agreeable to both authors.

This work was supported by JST SPRING, Grant Number JPMJSP2132.